

- ・ **インド** : **モディ政権下のヒンドゥー・ナショナリズムに対抗し、アルカイダ登場**
- ・ **バングラデシュ** : **イスラム過激派(ジャマティ・イスラミ)が勢力回復、アルカイダとの合流？**
- ・ **ミャンマー** : **仏教過激派(969運動)が台頭し、イスラム教徒を迫害、アルカイダの進出？**

1. アルカイダ、インド支部創設の衝撃

インドのモディ新首相は、若いころヒンドゥー至上主義を掲げる民族奉仕団(RSS)に所属していた。2002年に起きたグジャラート州の暴動では700人以上の死者が出たが、そのとき州政府の当時者であったモディ氏がそれに関与していたのではないかと疑念を持たれている。昨今、インドではヒンドゥー・ナショナリズムの運動が激化しており、モディ政権の誕生がそれに拍車を掛け、インドにおけるイスラム教徒への抑圧が懸念されている。

ヒンドゥー教徒の中には、「ジハードとダルマの対決」と叫ぶものも現れている。RSS が母体となって設立された最過激派組織の世界ヒンドゥー協会(VHP)の幹部は、ラーム寺院再建集会の中で、「ムスリムはジハードの名のもとにラーム寺院を壊し、インド各地で何千ものヒンドゥー寺院を壊した。ジハードはテロ思想である。我々ヒンドゥーはダルマでもってこのジハードに打ち勝たなければならない。このラーム寺院建設はジハード対ダルマの戦いの象徴である！我々はダルマの下に一つにまとまらなければならない！」と檄を飛ばした。本来、ヒンドゥー教における「ダルマ」とは、「人々が従うべき“社会的規範”という意味合いを強くもつもの」だが、この演説の中では、「ジハード」に対抗するものとされ、ヒンドゥー教徒を戦いに狩り出す手段に悪用されてしまっている。

このようなインドにおけるイスラム教徒の苦境を前にして、9/03、国際テロ組織アルカイダ指導者のザワヒリ氏は、インターネットに投稿された55分間のビデオ声明で同組織のインド支部「インド亜大陸のアルカイダ」を創設したと表明した。その中でザワヒリ氏は、**インド国内やミャンマー、バングラデシュ**などに住むイスラム教徒を「不正と抑圧から助け出す」と明言し、インド亜大陸で「ジハード(聖戦)の旗を掲げる」と強調している。

アルカイダはパキスタンとアフガニスタンの国境地帯を拠点とするが、2011年の米軍事作戦で指導者ビンラディン容疑者が殺害されてから衰退している。分派したスンニ派の過激組織「イスラム国」がシリアやイラクで勢力を拡大する中、薄れつつある「権威」を取り戻し、新たなメンバー獲得につなげたいとの思惑があるとみられる。一方、イスラム国家樹立を目的とするアルカイダの思想は、カシミール地方の分離を目指してインド国内で活動する他のイスラム過激派と相いれないとテロ問題専門家は分析し、アルカイダがインド国内で確固たる拠点を確立し、勢力を伸ばすことは難しいと予想している。

これに対してインド新政権は、国際テロ組織アルカイダによる新たなテロ攻撃に警戒を強めている。政府当局は「アルカイダが存在感を示すために、大規模テロを計画している可能性がある」と指摘。攻撃対象となり得る12州に対し、港湾や軍事、外交、宗教関連施設の警備を強化するよう命じた。治安当局は州政府への通達で「ザワヒリ容疑者自身が支部創設を表明したことが、アルカイダにとってのインド支部の重要性を示唆している」と指摘。アフガンやパキスタンでアルカイダの活動にインド人が参加していると認め、近く国内でテロ攻撃を実行する恐れがあると警告した。

2. ジャマティ・イスラミの勢力回復

バングラデシュでは人口の83%がイスラム教徒、16%がヒンドゥー教徒、残りの1%が仏教徒、キリスト教徒である。したがってイスラム教徒が国を牛耳っていると言っても過言ではない。しかしながら、そのイスラム教の内部には、42年前のパキスタンからの独立時の因縁により、いまだに深刻な対立が続いている。当時、バングラデシュは9か月間にわたる独立戦争で約300万人もの同朋を失ったという。その独立戦争に際し、「イスラム共和国としての一体性」を主張し、バングラデシュのパキスタンからの独立に反対し、パキスタン軍に加担して戦ったのが、ジャマティ・イスラミというグループだった。彼らは独立派のイスラム教徒を「ヒンドゥー教徒の回し者」と呼び、パキスタン軍の力を借り、徹底して攻撃し、多くのイスラム同朋を殺害した。またパキスタン軍兵士の乱暴狼藉を看過した。初めは戦いを有利に進めたジャマティ・イスラミも、インド軍が介入するに及んで敗退し賊軍となり、バングラデシュの表舞台からは姿を消すことになった。それでもバングラデシュ独立後、このジャマティ・イスラミは一時期非合法化されたが、しぶとくその勢力を温存し続けた。

2013年12月、ジャマティ・イスラミに所属するアブドゥル・カデル・モツラが絞首刑に処せられた。その罪名は、「1971年、パキスタンからの独立戦争の最中、ダッカ市内で大量殺人および集団レイプを行った」というものである。つまりモツラは40年以上前の戦争犯罪により裁かれたのである。わざわざ40年前の戦争犯罪を暴き出し、死刑を執行したのには、政権与党であるアワミ連盟の側に大きな理由がある。アワミ連盟は2009年の選挙時に、「独立戦争当時の戦争犯罪人の処罰を行う」という公約を掲げ、バングラデシュ人の愛国心に訴え勝利した。2014年1月の総選挙を控えたアワミ連

盟はその公約を果たす必要に迫られ、それを実行したというわけである。

当然のことながらジャマティ・イスラミは、2013年初めからモットの裁判を遅らすため、全国的なハルタル実施を行っていた。野党第1党のバングラデシュ国民主義党 (BNP) が行うハルタルは、ヒマをもてあましている若者たちが金銭で雇われ、適当に騒ぐ程度のものだが、ジャマティ・イスラミの行うハルタルは、死を恐れぬ若者たちが暴れ狂うものであり、実際に治安部隊との衝突の結果、2013年中に100人以上の死者を出した。このハルタルの激しさは、私自身も目の当たりにしている (既報)。このハルタルへの恐怖が、私をミャンマー工場建設への決断をさせたのである。

2012年9月、バングラデシュ南部、ミャンマー国境沿いにあるラム市で、イスラム過激派による仏教寺院および仏教徒の大規模な襲撃、略奪、破壊が行われた。私は20日後に、この現場に入り詳しく取材し、その惨状をただちに発信した。おそらく現場検証をしてこれを報道したのは、私だけであろう。このとき私は、ソフト・イスラムの国と信じていたバングラデシュに、過激派が存在しているということを知り、驚いた。しかもイスラム過激派から仏教徒を守ったというソフト・イスラム教徒を取材中に、突然、そのイスラム教徒の表情が変わり、話を止め、どこかに姿を隠してしまったことがあった。彼は10分ほどして再び姿を現し取材の続きに応じてくれたので、中断の理由を尋ねたところ、「イスラム過激派の若者が現れたので、身の危険を感じ、隠れた」と話してくれた。そのとき私は、そのことを深く詮索しなかったが、おそらくその過激派の若者とはジャマティ・イスラミだったのだろう。

ジャマティ・イスラミは豊富な資金を背景に、バングラデシュ全土にあるモスクに強い影響力を持っている。また農村地域に存在しているマドラサと呼ばれるイスラム教の宗教学校にも、その影響を広め、農村の優秀な学生に奨学金を出し大学に通わせる活動なども積極的に行っている。これらの結果、現在、ジャマティ・イスラミは、今回の選挙が正常に行われていれば、約10%の議席を確保すると予測されていた。アワミ連盟と BNP の勢力はほぼ拮抗している中、ジャマティ・イスラミが BNP と組めば、BNP が政権与党となり、アワミ連盟が下野することになるのは、ほぼ確実であった。アワミ連盟はその事態を避けるため、2014年1月、BNP やジャマティ・イスラミが総選挙ボイコットを表明したのを逆用して、野党不在のまま単独で総選挙を強行し、圧勝した。

その後、あれほど荒れ狂ったハルタルもほぼ収束し、バングラデシュに平穏な空気が戻った。国会はアワミ連盟の単独独裁状態となったが、総選挙をやり直せという声もさほど大きくはない。しかも不思議なことに、BNP は選挙後、「全国規模のハルタルを今後封印する」と宣言した。しかしジャマティ・イスラミは引き続きハルタルを行う姿勢を崩していない。このような状況下で、インドにアルカイダ支部が設立されたのである。現政権のアワミ連盟は、このジャマティ・イスラミとインドのアルカイダが合流することを強く警戒している。

3. 仏教徒過激派 (969運動) の台頭とイスラム教徒への襲撃

ミャンマーでは人口の90%が上座部仏教徒、4%がキリスト教徒、4%がイスラム教徒、その他が2%となっており、ミャンマーは国際社会から敬虔な仏教徒の国として認知されている。上座部仏教の高僧たちは、基本的には政治に口を挟まず、仏教徒信者からお布施を受けながら、信者の救済のために、日夜、修行に励んでいる。しかしながら、その仏教徒信者たちが軍関係者に弾圧された場合などには、それに対する抗議行動の先頭に立つこともある。それでも高僧たちのほとんどは穏健な行動を旨としている。一方、イスラム教徒は古来、バングラデシュ国境沿いのラカイン州に、バングラデシュやインドから移り住んでいる。またイギリスの植民地時代には、ベンガル人イスラム教徒らがインドから植民地政策の一環として移民させられてきており、彼らはラカイン州だけでなくミャンマー全国に居住している。なおラカイン州の周辺に住みついたベンガル人イスラム教徒は、ロヒンギャと呼ばれた。その数は70~100万人と推定されている。

第2次大戦中に、日本軍の進軍によって英国軍が撤退すると、ラカイン州にビルマ人仏教徒が回帰し、ロヒンギャの追放を開始した。しかし日本軍の敗退とともに、ラカイン州には仏教徒とイスラム教徒が混在することになった。1988年、当時の軍事政権は、ロヒンギャがスー・チー氏の民主化運動を支持したため、強烈な弾圧に踏み切った。たまりかねたロヒンギャ約30万人がバングラデシュに逃げ込んだ。その一部は現在も、国境沿いの難民キャンプに暮らしている。その後、数度にわたりロヒンギャは難民として、バングラデシュに亡命しようとしたが、バングラデシュ側がこれを拒んだため、ミャンマーに送り返された。ミャンマー側もそれを受け入れず、ロヒンギャの中には第3国を求めて海上を彷徨い、海賊に襲われたり、遭難したりするものも少なくなかった。

それでもロヒンギャや全国に散らばったイスラム教徒は、仏教徒と静かに共存していた。ところが2012年秋から2013年末にかけて、仏教徒のイスラム教徒襲撃事件が数多く発生した。いずれも小さないさかいに端を発し、仏教徒のイスラム教徒への大規模な襲撃、略奪、破壊に及んでいる。ことに2013年3月の終わり、メティラ県では仏教徒の暴徒がイスラム教徒の住居、店舗、モスクを襲撃し、40名ほどを殺害した。そのおりにイスラム教徒の店舗の残骸には「969」という数字がスプレーで書かれていた。「969」という数字は仏教における三宝を意味し、この騒動により、「969運動」という過激派仏教徒集団の存在がにわかにクローズアップされることになった。

2013年夏、私はヤンゴン北方の地で、工場適地を探していた。そのおりに、偶然、仏教徒によるイスラム教徒襲撃現

場に出くわした。それはすさまじいもので、イスラム教徒の店舗やモスク、車輛が焼き払われ、遠くからも黒煙を目にすることができた。道路が警察により封鎖されてしまったので、数時間、その場での待機を余儀なくされた。その地の仏教徒住民たちは、「昨日まで、この地のイスラム教徒と仏教徒は仲良くしていたのに、突然、こんなことになってしまった」と驚いていた。仏教徒の襲撃後、イスラム教徒たちはすぐにその場から逃げだし、警察に保護されたという話だった。

この数年、ミャンマーの各地で起きているイスラム教徒襲撃事件は、過激派仏教徒の「969運動」が扇動していると推測される。「969運動」を率いているのは、マンダレーを拠点として活動する高僧アシン・ウィラトゥ氏である。アシン・ウィラトゥ氏は、急速に大きくなる「969運動」の急先鋒に立って多数のスピーチを行い、仏教徒に対し、「969」を掲げる店だけで買い、イスラム教徒の店をボイコットするように呼びかけたりしている。なぜ、「969運動」急速に勢力を拡大しているのかは、今のところ定かではないが、政府内の反民主化グループが、スー・チー氏の信用を失墜させようとして、画策しているのではないかという見方もある。それは、「反民主化グループは、ロヒンギヤに肯定的な発言をせざるを得ない立場にスー・チー氏を追い込みたいのである。そうすれば、反イスラム感情を抱いている者が多いミャンマーの仏教徒の間で人気が高い彼女を貶められる。多くのビルマ人が仏教を保護するという名目のもと、暴力を認めているように見える。一方で、彼女がこの問題について沈黙を守れば、人権に対して毅然とした立場を取る彼女を支援する人々を失望させることになる」というものである。これに対して、スー・チー氏は現時点では態度を留保している。

このような状況下で、インドにアルカイダの支部が設立されたのである。アルカイダは弾圧されているロヒンギヤに手を差しのべることも行動範囲に入れている。現在、ミャンマー政府は自国内のイスラム教徒が少数勢力であるからといって、それを侮っておらず、同時多発テロも想定して、警戒を強めているという。

4. 「何をなすべきか」

バングラデシュ、インド、ミャンマーの地政学的関係はきわめて複雑である。右の地図を見れば一目瞭然だが、バングラデシュとミャンマーの間には、セブンスターズと呼ばれるインドの7州が存在している。この7州はインドの中でも極貧とされている地域であり、中島岳志氏はその著書「ヒンドゥー・ナショナリズム」(中公新書刊)の中で、「マニプールという場所は、第2次大戦中に日本軍が進撃し、歴史的な大敗を喫したあのインパールである。このミャンマーとの国境に近い地域に住む少数民族の人の中には、イギリスの植民地時代にキリスト教徒に改宗した人が多く、現在RSSが重点的にヒンドゥーへの改修活動を進めている地域である。また、ナガランドなどを含めたこの地域一帯は、インド独立以降、さまざまな形で分離独立運動が行われてきた場所であり、RSSにとっては、ネーションの統合のためにも何とかしてヒンドゥー文化への取り込みを進めたい地域なのである」と書いている。またセブンスターズには、土着の民間信仰も色濃く残っており、チン族などの武装組織も活動中である。さらに上述したように、バングラデシュのチッタゴン以東には、かつて日本軍と共に進出した仏教徒が居住しており、イスラム過激派のターゲットになっている。ミャンマーのシットウェー付近には、英国軍と共に進出したイスラム教徒(ロヒンギヤ)が居住しており、仏教徒過激派のターゲットになっている。そのような両国に、今回、アルカイダが触手を伸ばしてきたのである。



私には、イスラム教や仏教の教理や行動原理の是非を論じる力はない。しかしながら、暴力を振るってまで自らの勢力拡大を図ろうとする行為には、それがどんな宗教であろうとも絶対反対である。たとえどんなことがあっても、テロ行為はやめさせなければならないし、ハルタルという名の破壊行為を許すこともできない。また他宗教への襲撃、略奪、破壊などの行為も絶対に行わせてはならない。

人民大衆が過激な行動に走るのには、生活水準の低さが大きな理由としてあげられる。インド、バングラデシュ、ミャンマーは共に、世界の最貧国に近い。これらの国の生活水準を引き上げ、貧困を撲滅することが、彼らが過激な行動に走るのを阻止するもっとも有効な手段である。その意味で、日本政府が、インド、バングラデシュ、ミャンマーへ、それぞれ多額の援助を行うことを表明したことは、大きな意義がある。今後はその援助が、人民大衆の手に渡り、本当に貧困の撲滅に直結するかどうかを見定めなければならないが。

わが社は現在、バングラデシュのダッカとミャンマーのピーで縫製工場を稼働させている。数年後には、セブンスターズにも工場を建設したいと考えている。私は、わが社同様に、先進諸国の労働集約型産業が、これらの国に大挙して進出し、一気に生活水準を引き上げることが貧困撲滅のもっとも近道であり、それこそがアルカイダの進出を食い止める切り札だと考える。もちろん悪しき資本主義を持ち込み、貧富の格差を拡大するようなことは避けなければならないが。

以上